SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'92冬

＝第156回大学共同セミナー＝

●世紀末、甦るアリス

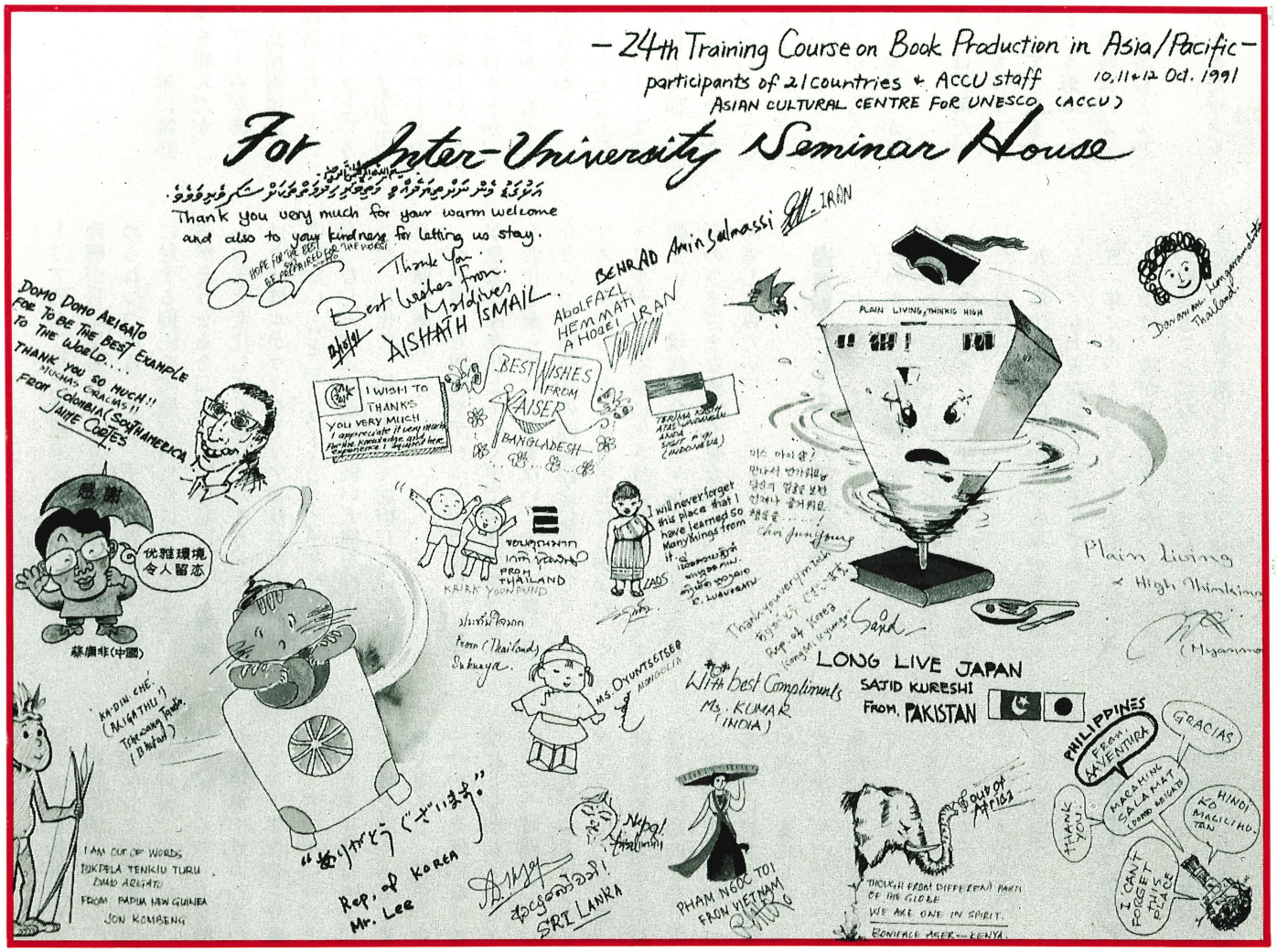
＝第28回大学教員懇談会＝

●改正大学設置基準のめざすもの——よりよい大学教育を実現するために——

＝第18回国際学生セミナー＝

●地球時代の生き方を求めて——湾岸戦争の問いかけるもの——

●業務通信　秋季３ヵ月の合宿研修



Plain living and high thinking

No.125

記号の国のアリス

――世紀末、甦るアリス――

東京都立大学人文学部教授　高山　宏

なぜアリスか

いまなぜアリスなのか。一九七二年に雑誌『現代詩手帖』がアリスの特集を組んだが、七〇年代初めに一度アリス・ブームがあった。七七年にその総決算として高橋康也氏の『ノンセンス大全』が出て一段落した。ところがその翌年にバーバラ・バブコックという人類学者の『さかさまの世界』という本が出、これをきっかけにスーザン・スチュアートの『ノンセンス』が出て、全然別の新しい『アリス』理解が可能になった。キャロルとか、その作品を取り巻くコンテクストが、もっといろいろ見えてきたのではなかろうか。

また、その間にアリスはアートとしても新しいインパクトが与えられた。バリー・モーザーというイラストレーターの作品を四、五〇点も使った二冊の『アリス』がグロテスクな表現で人を驚かし、ヤン・シャバンクマイヤのアニメ『アリス』も一種カルト・ムービーとしてアングラで大人気になった。アリスとはいったい何だろうかということが、もう一度問い直されるようになっている感じがする。

最初のアリス・ブームというのは、何だったのだろう。結局、カウンター・カルチャーの側から、近代と近代人が抑圧してきたものを解放し、抑圧の機構を撃つという形で、アリスやキャロルを使っていた。当時はたぶんそれしかなかったのだろうが、今読むと少しイデオロギー的に過ぎる。

この一〇年ほど、キャロルが生きたヴィクトリア朝の、特に世紀末にかけての社会への理解が目を見張るばかり新しくなり、かつ深められつつある。女性、子供、異民族、動物に対する抑圧の実態が明らかにされてきて、当然そうなると『アリス』作品に対する理解も大きく変化してくるはずだろう。これまではキャロルがヴィクトリア朝社会の中で抑圧されていたというストーリーばかりだったが、むしろ彼には逆に、弱い人間を抑圧していた一文化に、知らずして加担していたという一面がある。

その頃、万国博やデパートが出現し、世界が急激に商業化していく中で言語の持つ意味も変化を蒙らずにはすまない。金、交換、媒介といった同時代の強迫観念に照らして『アリス』が語られたことも余りにも少ない。キャロルがほぼ完全に生き抜いたヴィクトリア朝という、現代社会のモデルという世紀末社会のさまざまな動きを見ながら『アリス』を再考してみたい。

過渡期としての一八五〇年代

そのキャロルが活躍し始めた一八五〇年代に何があって、キャロルがどういう生き方をし、彼の作品とどう結びついていたのかを少しだけお話ししたい。

五〇年代は一時代にとってのみかキャロルにとっても大きな節目となる年であった。一八五一年にオックスフォード大学に入学したキャロルは、彼がどっぷり浸かっていた家族から離れることになったし、さらにこの頃彼は父方の名前を消し、ペンネームをつけた。個人的にも転換期だった。

時代の方はどうか。ものを組み替えるアレンジメントの技術の時代が始まっている。極致は辞書。ヨーロッパの場合、ある時代の知性の構造の在り方を簡単に見たければ、辞書か料理書を見よと言われるほど、レキシコグラフィーすなわち辞書編纂術というのは重要だが、五二年にロンドンで『ロジェの宝典』という不思議な本が出た。それまでの辞書のように言葉がＡＢＣ順に並んでいないこの辞典を見ると、体系の中で結びついていた一つ一つの因果関係なり枠組みが、この五〇年を境にして壊れている、あるいは再編成されるために一時融解しているという印象を受ける。

一九世紀末はひとことで言うと、レキシコグラフィーの革命期。一八世紀末の革命は、印刷技術の発達とか紙の質がよくなるとか、辞書の物理的な在り方を大きく変えたが、この時代の革命では『ロジェの宝典』に見られるように概念別に配列するなど質的な在り方が大きく変化した。一つのあるシステムがゆるくなってバラバラとほどけていって、数年後かにもう一度別のシステムに組み立てられていくちょうどその過渡期が、この五〇年代に当たっている。そういうアレンジ、リアレンジのシステム狂だったキャロルが楽しそうに『ロジェの宝典』を見ている姿を想像してもらいたい。

時代はすっかりアレンジメント気分

それから一〇年後に書かれた『不思議の国のアリス』という作品がどう見えてくるのか。

『アリス』の問題は、つまりはアレンジメントの問題なのではないか。

最近、『OED』という世界最大の英語辞書がCD―ROMに入ったが、まさにそれはアレンジメントの実験場である。三五〇万語も入っている辞書がボタン一つで、一遍に同意語辞典に変化する。つまりすでに組み立てられているものを、別のシステムで組み立て直す、またさらにそれを別のシステムでもう一遍組み立てることが簡単にできる。

組み合わせが何万通りも入っている小さな空間の発想は、すでにヴィクトリア朝の頃から出てきている。『OED』自体、その世紀末の所産である。知識自体、オリジナルなアイディアを生み出すというよりも、すでにあるアイディアの組み合わせ方の違いが新しい知識として認識されるという、とても今日ふうな時代になってきていた。アリス物語で言えば、変身の問題だ。あれを病と捉えるべきではなく、むしろ過渡期には一時こうならなければいけないという一種の自己解体のプログラムだったという気さえする。アレンジメントというのは、一つ一つの〈もの〉自体の価値ではなく、並んでいるとなりの〈もの〉との関係だけが問題になる世界なのだ。

それをキャロルは一面では、アイデンティティの喪失として書く。ところが反面ではそれをむしろ面白がり、この新しい時代を生きる「方便」としてあの精神分裂状態を身に引き受けた気配がある。「使用価値」が「交換価値」に変わっていく状況に対応した彼の立場は、同時代のアレンジメントや、別言すれば「循環」の世相を如実に反映していた。一つの〈もの〉が次には別の〈もの〉になっていく。更に別の〈もの〉になる。

一八六〇年代になってはじめて下水道がロンドンで整備された。たまったものは腐っていくというわけだ。一つのアイデンティティに固執している人間も。それは古典的な人間観とは全く相反する人間観だ。流れて行かないものは腐るという強迫観念がこの時代にはあった。

さらに一八五二年には、世界で最初の百貨店であるボン・マルシェが開店している。一つの店で一つの品目を売るという今までのような小売り商売ではなく、できるだけ大きな空間を使って、できるだけ多くの商品を置いて売るというヌーボー・コメルスが出現する。「新商法」だ。どこに何を置けば売れるかというアレンジメントの技術がここでも大きな役割を果たす。

テクノロジーのインパクト

『不思議の国のアリス』はイギリスでトンネル工事の技術が開発されていなかったら書かれなかっただろう、と思う。一八六〇年代は、いわゆるシールド工法が完全に定着した時期。産業革命がアートと対立するのではなくて、インダストリーがアートを生んだ最初の時期だ。これはとても大事な点である。

もう一つ、五一年のヨーロッパに「熱力学」が登場した。ニュートン力学みたいな、ソリッドなものを中心にものごとを考える習慣が途切れる。熱力学というのはこういうことを言っているらしいという民衆的レベルでそれが社会化されて、わかりやすい形で普及していった可能性がある。

印象派の画家たちにしても、熱力学のマニュアルを回し読みしていたのではないか。ソリッドなものがその画面の中には全然なくて、全体が液体化し、気体化していくような世界は、もはや絵画の歴史の中だけの問題ではない。今日の新物理学でいう「カオス」とか「ゆらぎ」とかいう問題がある。伝統的な遠近法の構図、ソリッドな〈もの〉をソリッドに描き写すという絵画理論は、大体この五〇年前後でダメになっている。

『アリス』だって「カオス」的な世界だ。〈変身〉していくアリスを作家キャロルはどう思っていたのか。自分が二つに分かれてしまってかわいそうだという書き方をしているかと思えば、二つに分かれるからこそ見えてくる世界もある。夢の世界に行ける人間だからはじめて会える変な動物たちがいる、つまり病になって自分が分裂したからこそ見えてきたものがあり、それがおもしろい、新しい世界だ、というような書き方をしている。方法として両面的な捉え方をしているのではないか。その方法の背後にあるものは、簡単に言えば一つの〈もの〉はむしろ一つの〈もの〉に留まらないほうがいいのではないか、それがこれからの時代ではないかというアレンジメントの認識を、どうやらこの作家は持っていた。

循環や配列の新技術とのかかわり抜きには、もはや『不思議の国のアリス』は読めないだろう。同じように、当時の光学文化がわからない人には、多分『鏡の国のアリス』は

〈11頁につづく〉

第156回 大学共同セミナー

＝主題＝ 世紀末、甦るアリス

期日
'91.11.15〜17

▼特別講演
二〇世紀末はキャロル的か？
京都大学経済研究所助教授　浅田　彰氏

▼ゲスト講演
鏡と皮膚
——芸術のメタファーとして——
国学院大学文学部助教授　谷川　渥氏

▼全体講義
記号の国のアリス
東京都立大学人文学部教授　高山　宏氏

▼セクション演習
A　ルイス・キャロルと解剖学
成城大学文芸学部助教授　富山太佳夫氏
B　〝ヘヴィメタ〟と〝軽メタ〟
——ノンセンスとリアリティ——
東京大学教養学部助教授　佐藤良明氏
C　普遍言語をめぐる夢想者たち
明治大学法学部教授　西垣　通氏
D　アリスの食卓——拒食症・ヒステリー・広所恐怖症——
東京都立大学人文学部助教授　富島美子氏
E　スチームパンクSF、または歴史改変小説の論理
慶応義塾大学文学部助教授　巽　孝之氏
F　ポストモダン別世界通信
文芸評論家　風間賢二氏

▼運営委員
東京都立大学人文学部教授　高山　宏氏
国際基督教大学教養学部教授　野崎昭弘氏

▼参加学生総数64名（男子29名・女子35名）
東京都立（6）、慶応義塾（5）、明治・国際基督教（各4）、早稲田・東京経済（各3）、東京・お茶の水女子・東京外国語・筑波・中央・立教・日本・津田塾・東京理科（各2）、東京工業・東京医科歯科・千葉・埼玉・青山学院・共立女子・聖心女子・東海・国学院・和光（各1）、その他11・以上25校。

◇

よく知られた児童文学者ルイス・キャロル（一八三二〜一八九八）はヴィクトリア朝と呼ばれる時期をほぼ完全に生き抜いた人であるが、この十年ほど、現在の我々の生活の基礎を築いたはずのこのヴィクトリア朝の、特に世紀末にかけての理解が目を見張るばかり新しくなり、かつ深められつつある。女性、子供、動物に対する抑圧の実態が明らかにされてくる中で『アリス』作品の理解も大きく変化している。万国博やデパートの出現に明らかな商業資本主義の中で、言葉の持つ意味も変化を蒙らずにはすまないからである。

シャーロック・ホームズものを生んだ同時代は犯罪や病気の蔓延した社会的に面倒の多い時代だった。キャロルの病気への関心には著しいものがあるが、作品中にもそうした徴候はいくらも見られる。その卓越した頭脳にさまざまな精神の病を抱えていたキャロルに対する関心は、別に興味本意の暗いものばかりとは限らない。一世紀遅れのこの世紀末にたたずむ我々の先駆者のようなところが目立つ。その知性に精神分裂症を引き受けることで、ノンセンスという不思議な言語の世界を彼はつくり出した。日常言語の彼方に数学言語にも似た機械的な表現法を求めた彼は、論理学の記号論理学化の動向と深く関わったはずである。すぐそこにコンピュータ言語の時代が迫っている。

言語の表象能力に一貫して抱かれた関心は、キャロルをパラドックスの問題、いわゆる自己言及性の構造への関心に導いた。二十世紀前衛表現はすべてこの関心を表現したものと言ってよいくらいで、その最初の部分にキャロルが見え隠れしている。だからこそ、一九二〇年代のシュルレアリスムの中で、さらに一九六〇年代の対抗文化の風潮の中で『アリス』は復権しもしたのである。最近の批評の方法の精緻化、新しい着眼点の連続の中で『アリス』を見る見方はますます多彩かつ面白くなっている。このセミナーの主旨は『アリス』を出発点に、さまざまな視点を試みながら、総体として一世紀前の世紀末の知られざる面を明るみに出してみることである。

◇

このテーマは共同セミナー委員会で数年、暖められてきたものであったが、アリス研究の第一人者である高山宏氏が共同セミナー委員に就任されたことによって、ここに実現をみた。従って、このセミナーは高山氏の卓抜した企画力に負うところが大である。また運営委員としてご協力下さった数学者の野崎昭弘氏には、セミナーの運営に加えて、普遍言語

『アリス』を見る見方は多彩で面白い——総括討論
コメントを述べる高山宏氏

参加学生の感想から

不思議な三日間

編集者・イラストレーター　小野寺由起

その三日間は、私にとって実に不思議な、特別な三日間であった気がする。最終学歴を終えてから随分たつのだが、その後も絵やデザインなどを学びに行っては学生面をするのがしょっちゅうであったにせよ、「何年生ですか？」と若き学生に聞かれてニマニマしていたからだけでは決してない。

少女の頃から二つの『アリス』の魅力にとりつかれ、卒論にも取り上げたり、絵本やイラストレーションのテーマにもたびたび描き、常に気になる存在でありつづけている。否、というよりも、私の生活自体に『アリス』が入り込み、『アリス』なしの生活は考えられない。キャロルとかアリスと聞くや否や、たいていは探し出してとんでいく。数年前、ついにキャロル巡礼にも出かけ、オックスフォードのフォーリィブリッジで溜め息をつき、クライストチャーチのキャロルの肖像画に涙した。オックスフォードで「アリス探し」オリエンテーリングもやり、チェシャ猫のモデルではないかと思われるモードリンカレッジ内の石像、アリスの通ったジョン・ラスキンのアートスクール、アリスの妹エディスの死を悼んでバーン・ジョーンズが描いたステンドグラス等々、探し出しては喜んでいた。

しかし、オックスフォードを実際に歩いてみると、キャロルの生きたヴィクトリア朝という時代と、オックスフォードというある意味で閉じた街に一生のほとんどを過ごしたキャロルの周辺をもっと知りたくなるのが人情である。ただのマニアである私には、今回のセミナーで、かなりそのへんが眼前にくっきりと見え、ある意味で開眼できた気がする。

＊

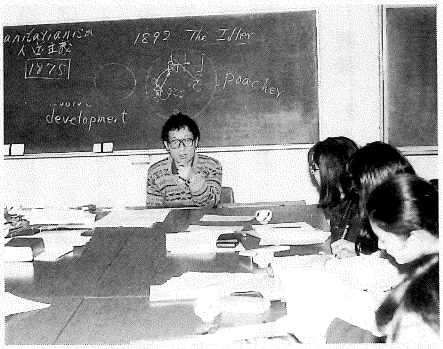
現代にキャロルを置いてみることで何が甦ってくるのか、キャロルを触媒にして何が見えるか。各々の先生方が様々な角度からキャロルの周辺やその時代を語られたのを、休まずノートを取り続けるうちに（なんと三日間でほとんどノート一冊分を使い切ってしまった！　こんなこと滅多にない！）キャロル自身の息づかいまでもがリアルに浮かび上がってきた気がしたのは私だけだったろうか。

私の参加したFセクションの風間賢二先生は、淡々とした語り口で、まず『アリス』以前のイギリスの児童文学作品とそれぞれにまつわるエピソードをお話しくださり、ヴィクトリア朝の子ども観・女性観を提示することで『アリス』の物語の特異性と新しさを浮き彫りにしてくれた。そして『不思議の国のアリス』とフェミニズムの話（アリスは物語の進行につれ、新しい女になっていく）、キャロルと同時代のラファエロ前派についての言及など、私自身も大いに関心のあるところだったので満足できた。また、アメリカ版『アリス』ともいわれる『オズの魔法使い』前後のアメリカの埋もれたファンタジーのリストをズラッと並べ、エイギリスとアメリカのファンタジーの比較、魔法の三原則など興味深いお話が続いた。風間先生のおたく的ともいえる埋もれたフェアリーテイルとファンタジーのリストは、それだけでも相当の価値があった。

＊　＊

ほとんど休みなく、ギッシリつまったプログラムが時間通りにこなされ、かなりハードだったはずなのに、不思議と疲れを感じることもなく、ほんとうに充実した三日間であった。このセミナー・ハウスをとりまく樹木らに宿っている木霊のせいかもしれない。

学生時代はこのような機会に巡り合えなかったが、今、こんな体験が味わえた不思議な幸運に、あれから私はずっと興奮している。職場に戻り、興奮して語る私を見て皆が羨んだことは言うまでもない。



演習風景――中央は富山太佳夫氏

複数の『アリス』

筑波大学大学院博士課程　秋山　義典

アリスはおもいました。どうしてもっと前から教えておいてくれなかったのかしら。わたしが知らないあのひとたちは、わたしの知らないいくつものことがらを知っていて、あのひとたちの知らないわたしが知っていることといったら学校のべんきょうでおそわったことだけみたい。でも、知らなくても当然。いきなりわけもわからないこんなところまできてしまったのですもの、なにが出てきても平気。ずらりと並んだ6つのメニュー。「ルイスキャロルと解剖学」「ヘヴィメタと軽メタ」「普遍言語をめぐる夢想者たち」「アリスの食卓」「スチームパンクSF、または歴史改変小説の論理」「ポストモダン別世界通信」これ、いったいなんのセミナーでしょう？どこの大学でこんな風変りな演習があるのかしら？　みんな聞いたこともない、見たこともないものばかり。なんだかへんなアリス！これはわたしじゃない！

＊　＊

アリスの困惑？　いや、これはいまの大学生の困惑なのだ。少なくともこのセミナーに集まった六〇余人の参加者はそう思ったにちがいない。いまの学校はなんのためにあるのだろう。出席日数に足りること。いわれたようにレポートを提出すること。学期末定期試験はがんばること。しかしそれがわたしたちのためにあるのだとすれば、わたしたちが知りたいと思うことがそこにあるとするならば、わたしたちはそこに集まるのである。そこに行きたいと思うのである。そこに行ってだれかと話しがしてみたいと思うのである。週末の予定をキャンセルしてこれだけのひとたちが集まったのである。ここには成績評価もなければ、単位の認定も存在しない。そんなことはどうでもいい。もしかしたらキャロル的なるもののなかに二〇世紀末のわたしたちにとってのあらたなる希望の原理が見いだされるのかもしれない。そんな予感がわたしたちをこの場所へと導いたのである。

このことは世紀末というある種の思考の枠組とつながりが見いだせると思われる。つまり従来の世界が築き上げてきた絶対的な現実がこれまでと同じように機能しにくくなってきているからなのだ。この時代に学校という場が同じ現実を均質的に反復するだけならば、いったいどうなるだろう。学校こそもっと多様な現実に向って開かれていなければならない。あるいはいくつもの現実を提示する必要がある、なにかをとても知りたい、とてもいいたいと思っている人々のために。

＊

大学セミナー・ハウスは、極めて流動的なキャロル的な世界のなかでこのもうひとつの現実に向かって複数の「アリス」のかたちをみごとに提案することに成功したのである。このことは、この企画に加わった各講師陣が不思議な力を発揮したからかもしれない。つまり、かれらはみな一様にポップな知性の持ち主であり、半分はもっとも悲惨な学校体験しかないパワフルな「団塊」世代であり、半分はパロディーと記号論的世界を生きてきた変化球的「新人類」世代という構成になっていたことは興味深いかもしれない。最終日の総括討論の場が異様な盛り上がりを見せ、だれもがその興奮を押えることができなかった。

をめぐる演習指導を担当していただいた。ここに両氏をはじめ、この企画に賛同してご協力を惜しまれなかった浅田彰、谷川渥、富山太佳夫、佐藤良明、西垣通、富島美子、巽孝之、風間賢二の各氏に対して改めて謝意を表したい。

セミナーではヴィクトリア朝の知られざる局面が次々に明らかにされ、またこれまでとは違う『アリス』の理解が試みられたり、大いに議論は盛り上がった。別掲の感想文が、そうした状況と雰囲気を生き生きと伝えてくれている。

第28回 大学教員懇談会

＝主題＝ 改正大学設置基準のめざすもの

――よりよい大学教育を実現するために――

期　日　'91.9.28～29

▼講演

改正設置基準のめざす方向
大学審議会委員・中央大学法学部教授　戸田修三氏

▼パネルの発題

1　大綱化に向けての筑波大学の改革と現状
筑波大学教育計画室長・社会工学系教授　佐藤英夫氏

2　SFC（湘南藤沢キャンパス）の新しい試み
慶応義塾大学SFCメディアセンター部長・環境情報学部教授　高橋潤二郎氏

3　リベラル・アーツ教育のカリキュラムと教員組織
国際基督教大学学務副学長・教養学部教授　大口邦雄氏

4　シンセシス主導型の工学教育
芝浦工業大学システム工学部長・教授　小口泰平氏

5　工学教養について
東京大学総長特別補佐・工学部教授　吉川弘之氏

▼運営委員

上智大学外国語学部教授　蠟山道雄氏（委員長）
芝浦工業大学工学部教授　石黒哲郎氏
東京大学教養学部教授　平野健一郎氏
日本女子大学人間社会学部教授　高橋たまき氏
国際基督教大学教養学部準教授　吉野輝雄氏

▼参加者68名（31校）（運営委員・講師を含む）

上智（5）、中央・防衛大学校（各4）、東京農工・東京都立・日本女子・立教・国際基督教・大妻女子・東京電機（各3）、東京・電気通信・筑波・北海道教育・明治・法政・日本・武蔵工業・東京経済・工学院・芝浦工業・杏林（各2）、千葉・図書館情報・慶応義塾・明治学院・成蹊・武蔵・青葉学園短期（各1）

◇

戦後、わが国の大学教育の枠組みを規定してきた大学設置基準に、制定以来の大改革が行なわれ、'91年7月1日より改正設置基準が施行された。大学審議会が'87年に発足して4年が経過しているが、この間、当ハウスの大学教員懇談会では大学の魅力開発（UI）の一環として、大学の教育機能の見直しと大学教員の能力開発をめぐって議論を行ない、FD（ファカルティ・ディベロップメント）プログラムの開発とその実践に力を注いできた。

今回は、第23回懇談会で臨教審第二次答申をめぐり大学教育の充実と個性化を議論して以来、5年ぶりで本来の懇談会に戻った。

「大綱化」がキーワードとなった設置基準の改正は、大学教員の強い関心を呼び、参加者は総勢68名に及んだ。

◇

プログラムの冒頭に置かれた講演で、大学審議会委員の戸田修三氏は次のように述べられた。

今回の改革はしばしば明治5年の学制発布や戦後の教育改革と並んで重要な意味を持つと言われているが、大学審議会は、あくまで制度論による条件作りをすることがその任務であり、大学教育を個性化するという具体的問題は、大学人自身に委ねられている。

そのことは、従来、大学設置基準によって国が規制してきた方向を打ち破り、大学がそれぞれの知見と識見を駆使して、多様で自由な大学教育を設計することを目指したものであるが、一歩誤まれば大綱化、弾力化の陰に隠れて、教育水準の低下を招く危険も大きいという意味で、大学の自己責任を伴うこと、また、その趣旨を活かしていくにはどうしても大学人の意識の変革が必要となる。

改革のポイントは第一に、画一化の排除、即ち大学設置基準の見直し、第二には大学評価システムの確立、第三に大学教育の改善に必要な財政措置の整備、である。その際に大学の自己評価がともすれば大綱化とパラレルな関係で捉えられがちであるが、大学は本来、自己の教育研究活動を不断に点検すべきものである。

それでは「大綱化」はどのように省令化されているのか。最も重要な部分は、第19条「教育課程の編成方針」である。その第2項で〝幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない〟と表現されている部分に、新制大学に一般教育が導入された精神が活かされている。大学、学部は自主的に学則を改正し、第19条の枠の中で自由に教育課程を設けることが可能であり、その際には建学の精神、学部学科の設置の趣旨、目的との相関関係でなされるものである。

◇

続く第Ⅱセッションでは、すでに大学で手がけている試みについての事例が紹介された。

筑波大学はすでに新構想大学として特色のある教育課程や組織を持って発足しているが、大綱化に伴う改革としては各

教育組織に自由を与え、共通科目として必修にしていた科目の一部を自由選択制にしたり、自己評価・自己点検を全学的に広めることとし、教員に詳細なシラバスを書かせ、研究業績を提出させる一方、学生による授業評価、教員の公募制の徹底により、教育内容を高めることなどが紹介された。

次に私立の総合大学の立場から、慶応義塾大学が湘南藤沢キャンパスに開設した総合政策学部と環境情報学部の「革新型教育」について、当事者としてその創設事業を担われた高橋潤二郎氏が、OHPを駆使して詳細な報告を行なった。同氏によれば、これら二学部の創設は大綱化を先取りしたものであり、その99%は完了しているという。

「問題発見・解決型」の教育目標を掲げたSFCの特色は第一に、4年間に亘るカリキュラムの体系化、即ち一般教育と専門教育の課程を楔型にし、両者の教員の区別を廃止する、第二に半期制を導入し、すべての科目を2単位とする、第三に学科制をとらずに、コース制に基づくナビゲーション方式を導入する、の三点である。また、自然言語と人工言語の二本柱を立て、諸国語概説のオリエンテーションを充実させる一方、コンピュータの基本動作や、ワークステーションの操作を身につけさせることも、カリキュラムの基本構成上、重要なポイントになっている。

一方、国際基督教大学（ICU）は米国のリベラル・アーツ・カレッジをプロトタイプとして構想された大学であるが、'52年創立当時の日本にはその概念はなく、教養学部という名前で認可を受けることになった。大口邦雄氏によれば、国立大学等の教養学部、教養部とは本質的に異なるから、学部名は再考を要する問題ではないかという。

ICUにおいては科目群と担当教員の関係は、授業科目の区分の中でそれぞれにあるのではなく、相互に関連し合ってカリキュラムの一体化が図られているという意味で、大綱化の先取りが行なわれているのであり、また一般教育については、リベラル・アーツの伝統を守るために、絶えず学内で議論を尽していることが紹介された。

次は工学系教育について、単科大学の立場から芝浦工業大学の新設学科の例が、総合大学の立場から東京大学工学部の例が紹介された。

大学人の意識変革にかかる大綱化の成否
——68名が参集して熱い議論——　('91.9.28)

芝浦工業大学は約10年の歳月をかけ、'91年にシステム工学部を新設した。その目的とするところはシンセシス主導型の工学教育である。テクノロジーが高度化、複雑化、多様化するに伴いハードウェア、ソフトウェア、ユーズウェアの三者の健全なあり方を追求する学問が必要であるという。

東京大学は、大綱化の問題を一般教育あるいは教養教育の重視と捉え、工学教養はその一つの背景であるとして、吉川弘之氏は工学教育の現状を次のように批判された。

工学には二つの意味がある。一つは機械工学、電気工学といった領域工学のかたちで実体として存在するものであり、もう一つは領域工学のいわば集合概念としての工学である。しかし各学科はそれぞれに細分化した専門教育を行なっており、学部に共通に抽出される概念はない。領域工学は各領域間の関係を問わず、自閉的な状況にあり、アナリシスを記述形式とした理学より位が低い学問とみなされている。しかし科学の歴史は二百年にすぎないが、技術は人類と共にあり、理学がなくても工学は成立する。そこで必要とされるのが共通集合としての場であり、吉川氏はそれをアブダクションを主体にした記述形式をもった「一般設計学」と呼び、学問の復権とはシンセシスの再評価であると述べられた。

◇

最終セッションは、前日の分科会で個別具体的に行なわれた議論について、運営委員四氏から報告がなされた。

司会の蠟山氏は、大綱化とはこれまで続いてきた文部行政の、大学教育に関する行政指導の部分に現われている考え方を大幅にパラダイム変換するという意味の法的表現であり、吉川氏の提出された学問の復権とは、工学部だけでなく各学問分野において、新しい時代の要請に応えた学問はいかにあるべきかを問うことと同義であろう。その表現である教育はいかにあるべきかを考え直すことが自己点検であり大綱化の背後にある理念ではないか、と前置きし、①一般教育、②自己点検、③大学の主体性、④文部省の自己点検の四点を抽出されて、討議に移った。

議論の詳細は紙面の都合で省略するが、次の二点だけ記しておきたい。

一つには、人間の根源的な知的活動の場に立ち戻って考える場が一般教育であり、専門学部で一般教育が消失してしまうとすれば、その大学の学問に対する最も基本的な姿勢が失われることになる。

二つには、教員の間にコミュニティが自然なかたちで形成されていかないと、カリキュラムや授業全体の整合性は出てこない。筑波大学の国際関係学類が二年前から始めている月曜ランチやICUのファカルティ・リトリートなどはそうした環境作りとして参考となるだろう。

第18回 国際学生セミナー

‖主題‖ 地球時代の生き方を求めて

——湾岸戦争の問いかけるもの——

期日
'91.10.25〜27

▼シンポジウム
90年代の世界像と日本の選択
【パネリスト】
法政大学法学部教授　鈴木佑司氏
東京大学教養学部助教授　山内昌之氏
東京大学東洋文化研究所助教授　田中明彦氏

▼セクション演習
A　国連と安全保障
国際基督教大学国際関係学科教授　功刀達朗氏
東京大学法学部教授　鴨　武彦氏
一橋大学社会学部教授　油井大三郎氏
慶応義塾大学法学部助教授　添谷芳秀氏

【運営委員】
東京外国語大学外国語学部教授　宇佐美　滋氏
筑波大学歴史・人類学系助教授　小野沢正喜氏
独協大学外国語学部教授　竹田いさみ氏
慶応義塾大学法学部助教授　添谷芳秀氏
国際基督教大学教養学部準教授　宮永國子氏

B　湾岸戦争の教訓——先進工業国の文化的洞察の開発を求めて——
明治学院大学国際学部教授　武者小路公秀氏
国立民族学博物館第三研究部助教授　大塚和夫氏

C　第三世界の軍事化と民主化
——武器輸出を中心に——
武蔵工業大学工学部教授　志鳥學修氏
放送大学教養学部助教授　高橋和夫氏

D　「新世界秩序」とアメリカのディレンマ

▼参加学生86名（男子55名　女子31名）
①　国籍別（8ヵ国）
日本（76）、アメリカ（3）、中国（2）、オーストラリア・インドネシア・メキシコ・マレーシア・ベルギー（各1）
②　大学別（28校）
東京（14）、国際基督教（8）、独協（7）、早稲田・慶応義塾（各6）、成蹊（5）、上智・明治（各4）、埼玉（3）、東京外国語・立教・武蔵工業・明治学院・津田塾・同志社（各2）、一橋・筑波・長崎・下関市立・中央・法政・日本・東京女子・武蔵・帝京・東京国際・恵泉女学院・放送（各1）、その他（4）。

◇

湾岸戦争は「ポスト冷戦」期の新たな国際秩序を模索しつつある世界に対して、様々な問題を投げかけた。改めて脚光を浴びた国連の安全保障に対する役割、中東など非西欧諸国への文化的洞察、さらに湾岸戦争の禍根となった大国の武器輸出、そして莫大な双子の赤字を持ちつつ「新世界秩序」を模索するアメリカのディレンマなど検討を要するものが山積している。国際学生セミナーは4回を周期とし、大きなテーマを追求しているが、今回は「地球時代の生き方を求めて」と題するシリーズの2回目にあたり、様々な国際問題を集約した湾岸戦争にスポットをあてて、その生き方にふさわしいパラダイムを探求した。

今日話題となっているテーマだけに問題意識の高い学生が集まり、終始白熱した議論が展開された。プログラムは、まず各講師から各セクションの目的について発題があり、それに従ってその夜からセクション演習（内容については後述）が展開された。

◇

二日目の午後に行なわれた「90年代の世界像と日本の選択」と題するシンポジウムでは、まず東南アジア研究の鈴木佑司氏、イスラム地域研究の山内昌之氏、そして国際政治学の田中明彦氏の発題を踏まえて討論が行なわれた。

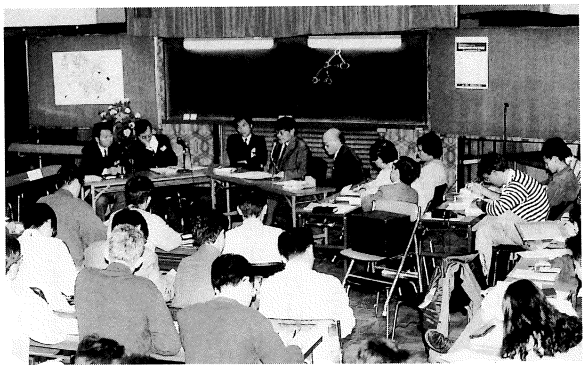
鈴木氏は、アジア・太平洋地域という概念を歴史的に説明したうえで、冷戦の終焉がこの地域に共通にもたらす影響について、三つに大きく分けて予測された。一つは、冷戦の終焉とアメリカの勝利によって世界が一極化するのではないかという不安と、逆に小国の時代が来るのではないかという期待感が入り交じっている状態にある。また国内においては国家権力を集中させるか分散させるかの攻めぎ合いが見られる。かつてインドのインディラ・ガンジー首相が一九六〇年代に「国家が強くなければ民主主義も何もない」とか「民主主義は贅沢である」などといったように、アジア地域では国家に権力を集中させて経済発展を図るのが普通であった。しかし民主化を促進していくべきだとする考えと、権力をより集中、能率化して新しい時代を乗り切るべきだとする考えが錯綜している。そして個人のレベルにおいてもできあがった国家システムに依拠していこうとするライフ・スタイルと、自立を求めるライフ・スタイルとが攻めぎ合っている。その背景にはシンガポールや韓国に見られるように急速な大衆化による都市中間層の形成と同時にミーイズムが発生するという複雑な状況がある。

こうしたアジアの状況に対して我々はどう対応すべきなのか。現在我々は、政治的な役割を果たすために軍事的な手段を強調したり、国家の枠組を越えて広がる地域的な経済を軽視するなど、きわめ

て保守的な対応しかしていない。軍事的な安全保障の限界は今日明らかになりつつある。カンボジアなどの紛争地域では、信頼醸成をはかったり、そもそも紛争を必要としない積極的な平和をうちたてるための国家やNGOによる協力体制の制度化が必要となる。こうしたものに経済協力や技術移転などを中心に積極的に関わっていくことが今後求められるだろうと問題提起された。

山内氏は、湾岸戦争後の新しい世界の課題として国家、国民、民族を律するシステムが不安定化していることを指摘しながら、中東地域を例に、新しいナショナリズムの時代の課題に言及した。

一つは独立した主権国家をもちたいという民族の自決権の問題である。かつて、植民地状態から脱するため、または先進国の気まぐれから大きな多民族国家が現われた。しかし「旧」ソ連地域に見られるように、軍事的同盟国家から条約に基づいた共同体へという変化のなかで、大きな多民族国家という形態が時代の流れにそぐわなくなってきているのであり、いわば国民になれなかった民族の「民権」が問題となるのである。



「90年代の世界像と日本の選択」をめぐるシンポジウム
('91.10.26)

二つ目には人権と民主主義という問題がある。イスラムには主権と神との関わりなど独特な民主主義に対する価値観がある。イスラムはそもそも民主主義なのか、民主主義と相容れないのかにはいろいろと論争がある。例えばエジプトのイスラム同胞団に見られるようにイスラム復興主義が政権をとった場合、はたして多様性に寛容であろうか。殊に今後「旧」ソ連地域のように、人権感覚の希薄で「解放」されたばかりの地域において非イスラムとの共存が問題となろう。

三つ目にはソ連などで帝国支配が崩れたことによって地域の再編成が行なわれている。これらの地域では、民族紛争や宗教対立が多発するなどいわばパンドラの箱が開いてしまう結果となっている。こうした地域の再編は平和裡に行なわれなければならないが、そのために先進西側諸国は何らかの援助をしなければならないのではないか。しかしEC、北米諸国はソ連全域に対して援助ができるわけではない。ここでソ連の中央アジア地域を含むいわゆる「新中東経済領域」に対する日本の役割が示唆されてくると考えられよう。

田中氏は冷戦が終わり、湾岸戦争が終わったことは二つのことを意味すると述べられた。一つは古典的パワーポリティクスの終わりということである。一八世紀、一九世紀における社会ゲームに特徴的なのは主権国家が戦争などの手段を用いて国家権力を最大化するというゲームと、市場における企業の利潤極大化というゲームである。一つ目について言えばかつて武力行使は国際紛争を解決する手段として当然に認められていた。ところが戦争兵器が近代化し、兵隊のみならず民間人をも殺傷するようになるとこのゲームは割に合わなくなり、やがて日本を含めて国権の発動たる戦争は一般的に禁止された。ただ冷戦秩序のなかで大国はこれを保持し続けていたのである。ところが冷戦の終わりで大国もこれを持つことが意味をなさなくなってきた。しかしながら湾岸戦争は、大国のみならず小国もこの権利を保持したいとの現われであった。これが失敗に終わったことで古典的パワー・ポリティクスがやりにくくなったことは確かである。

もう一つは産業資本主義の再正当化ということである。長らく国内では労働者の窮乏化をすすめ、国際的には発展途上国を搾取するという批判が産業資本主義に対してなされた。マルクス・レーニン主義を奉じる国々は世界システムから我が身を切り放し自力更生の道を図ったが、これはかえって悲惨な結果を招いた。しかし一方でシステム内で成功するNIEsの誕生があった。そして冷戦の終わりによって産業資本主義に変わりうる処方箋はないことを明らかにした。

こうした状況のなかで好むと好まざるとにかかわらず日本のヘゲモニーは広がりつつあり、何らかの役割が期待される。氏は日本の役割を国際公共財の提供であるとし、自由市場の確保や科学技術の整備、環境保全や紛争処理に積極的な役割を果たすべきであると主張された。

これらの三氏の発題をたたき台として、シンポジウムの後半では活発な議論が展開された。

◇

三日間にわたって議論されたセクション演習の内容は以下の通りである。

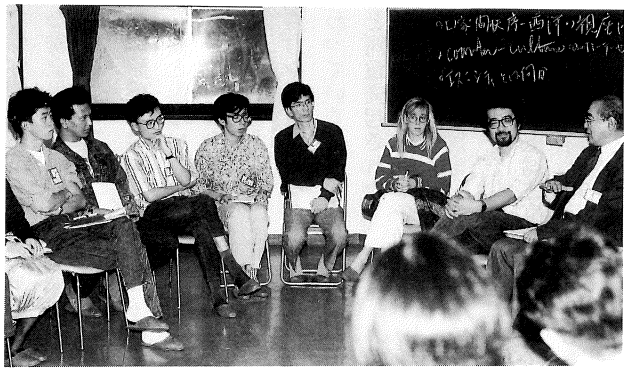
まずAセクションにおいては、国連及び外務省で長年実務を経験された功刀氏が、ポスト冷戦期の国連の役割について述べられ、紛争に対する国連の防止外交の必要性や、国連におけるNGO参加の重視、そして複数の安保理の創設（①平和・軍縮・人権、②資源・人口・開発・環境、③技術・教育・文化）などの考えを提示された。これは安全保障を環境保護や資源保全を含めたより広い概念で捉え、国連がそれに効果的に取り組もうとしていることにほかならない。

次いで鴨氏は冷戦の終焉というものが国際社会の原理原則を構造的に変化させていることについて、ドイツ統一などを題材に話された。そして覇権交代などの

パワー・ポリティクスを変更し、覇権そのものの正当性を壊してしまうような民主的決定の国際システムを模索したいとEC統合などを例に出しつつ述べられた。

学生の間の討論では、地域紛争における国連の対応について、果して経済制裁が武力制裁より人道的かという問題や、PKOがPeace Keepingだけではなく Peace Building や Peace Enforcement など広範囲にわたって活動する可能性について、イラク・クウェート監視団やカンボジア暫定行政機構を題材にして議論された。そして自衛隊のPKOへの参加の是非をめぐって日本の紛争地域研究の不足や自衛隊のPKO参加による国際貢献など、数々の問題が浮き彫りにされた。

Bセクションにおいては、武者小路氏は今後多発するであろう低強度紛争に対しては従来の西洋法学的なアプローチでは限界があると述べられた。平和は秩序ではなく混沌であるという仏教の考え方に見られるように、紛争を絶対悪として軍事的介入を行なうことを避け、異なるアイデンティティをもったグループ同士の信頼醸成を地道に図ることで、紛争を「解決」ではなく「変質」させるといった視点も、平和とエスニシティーの問題を考える際には必要なのではないか、と話された。



夜更けまで議論がつづいて——演習のひとこま

国立民族学博物館に勤務されている大塚氏は、民族の枠組は歴史の流れとともに絶えず変化することを強調され、特に日本人は民族、人種、国民を混同しやすいと注意を投げ掛けられた。また、我々に第三世界の見方を見誤らせる要因として情報源が先進国に偏っていること、これらの歪みを心に留めて第三世界のエスニシティーをより深く知るように地道に努力していくべきであると話された。

学生の間では湾岸戦争とエスニシティーについて次のような議論が展開された。フセインが自らの目的のためにアラブのエスニシティーを利用したことや、クルド民族の問題から始まり、日本人との関連で『悪魔の詩』を題材にしてイスラムの論理と言論の自由をどこまで整合させられるかなど日本人にとってのエスニシティーや文化相対主義について突き詰めた議論が展開された。

Cセクションでは志鳥氏から「武器移転」や「紛争」、そして「軍事化」の定義が示され用語の使い方に注意が促されるとともに、国際的な武器移転が歴史的にどのような形でどのような国々で行なわれたかについて説明がなされた。

中東政治が専門の高橋氏からは、中東湾岸地域の政治について歴史的に綿密な検証がなされたうえで、湾岸危機の発生について、冷戦構造の終結によるのではなく、中東湾岸地域の軍事バランスの崩壊という地域側の視点で物事を捉えることの重要性が指摘された。

学生の間ではまず湾岸危機の要因について彼らの意見の練り合わせが行なわれた。湾岸危機の直接の契機は、イランとの軍事バランスの崩れにあったとされる。しかしながら、この危機は、石油産出地帯という産業資本にとってきわめて重要な地域に起ったが故に、冷戦の崩壊という世界システム論のなかで捉えざるをえなかったということも指摘され、どちらの視点も欠落させない複眼的な思考の重要性が認識された。また軍事化と民主化の関係については一義的な答えは出

批判で終始しないために

東京大学法学部4年　吉原　健吾

今年もまた80人を超える学生が国際学生セミナーに集い、豊かな自然に囲まれて尽き果てぬ議論を展開した。私事にわたるが私のこのセミナーとのつきあいは足駆け三年に及ぶ。三回のセミナーにはそれぞれの鮮烈な個性があるし、この三年間に北野の立体交差など周囲の環境も少しずつ変わってきている。しかし常に変らないのは多くの問題意識をもった学生たちが集い、語り合うその姿である。そのなかで友情を育み、意見の提示、説得などのテクニックを洗練させていく様は今後とも変わらないように思われる。

今回のセミナーが終わり各人は各様の感慨をもったと思う。毎度のことながら知識の深い学生やボランティアなど実践で示す学生に感動したり、逆に自分の勉強不足を痛感した学生も多いであろう。今回のテーマは「湾岸戦争の問いかけるもの」、集約すれば世界の平和はどうしたら維持できるかということにほかならない。国際社会に平和維持のシステム、活動の導入を模索するもの、サダム・フセインの一蹴に悲嘆し平和のための軍事力を唱えるもの、またそれに異を唱え、非暴力の誓いを新たにするものなど様々であろう。そうした気持ちが各人のなかに芽ぶいてきていると思う。

ただ学生にありがちなのはその自由な立場に甘えて批判のみに終始することにあるのではないかと私は常に感じている。無論学生の本業は学業であろうが、それに支障を来さぬ限りこのセミナーで得た種を育てることは今からでも可能だと思う。例えば経済援助、文化交流などの組織に参加していくこと、こうしたことも平和的環境の醸成に役立つはずであり、それにカネ、モノ、ノウハウを開発・提供していくことは学生の立場でも十分可能だと思う。またこうした体験学習も授業に劣らぬ立派な学業だと思う。

忘れないでほしいのはどういうものであれ、このセミナーでえた種を各人各様でよいから育ててほしいということである。具体的な行動もよし、絶えず議論でもよし、優れた平和観をもつ政治家に一票を投ずることでもよし、また子供に平和について語ることでもいい。一番悲しいことは学生時代あれだけ威勢が良かったのに現実の波にさらされることでその種を納屋にしまい込んだり、腐らせたりしてしまうことであると思う。

今後、自分なりのやり方でこのセミナーでえたものを思索し、議論し、行動しつづけてほしいものである。そうでない限り私達の将来に良き展望などないのではないだろうか。

「記号の国のアリス」つづき（3頁より）

わからないだろう。万国博覧会が成功したこともあって、一八五一年にはガラス税が撤廃され、大いにガラスを使おうということになった。『アリス』の冒頭に金色の鍵を乗せたあのテーブルは「ソリッド・グラス」と書かれている。その言葉を読んだだけでその家がブルジョアの家であることがわからなければならない。

この作品が書かれる直前に彼はあるレンズを使った興業を見に行っている。『鏡の国のアリス』は、突然湧いたアイディアではない。「ファンタスマゴリア」といって、二枚の板ガラスの組み合わせで存在しないものの姿を舞台の上に出してみせるショーを彼はさんざん見ている。それが『鏡の国のアリス』に使われたのではないか。

テクノロジーの問題が、いままでのキャロル理解には欠けている。たとえば推理小説のような作品もここで言うテクノロジーである。言語それ自体、コレクションの対象になる一つの〈もの〉だから。この時代は言語それ自体をマテリアルとして捉えているところがある。言葉がフェティシュの、庶物崇拝の対象になってしまうことの問題もこの頃からだ。〈もの〉としての言葉。ハンプティ・ダンプティのように言葉を使役するみたいな、われわれから見ればただの比喩にしか過ぎないようなことが、当時はかなりリアリティーをもっていたのではないか。

言葉の中で「発明」する

最後にキャロルと発明について考えてみよう。一九世紀末は発明の世紀だったが、そもそも「発明」とは、今までにある要素間の関係を解体して、その解体した要素から新しいコンビネーションを作ることである。これはオリジナルの能力ではなくて、むしろ組み合わせの才能になってくる。一般に世紀末というのは、まさにそういう時代である。自分でオリジナルに作り出したものは、そうした時代にはほとんど何もない。それまでにあるものを複数組み合わせて作っていくにすぎない。それが世紀末に固有の「発明」の原理である。

よく知られているようにキャロルも発明狂だった。たとえば郵便を出すときなどに使うガムテープ、乗り物の振動でも倒れないチェス盤、あるいは安全ピンなど彼の発明品は、今日にも残っている。しかもかれの発明の才能は〈もの〉だけにとどまらない。言葉も〈もの〉だという感覚で生きている時代にかれは言葉の中で発明したという言い方ができるだろう。言葉の中でも組み合わせを考える、つまり言葉自体の意味ではなく、言葉と言葉の関係にヴィクトリア朝は関心を見出した。ノンセンスとは言葉の解体と新しい組み合わせの術なのだ。

言葉の中で発明するというキャロルの感覚は、これまでは疎外の表現だとネガティブに捉えられてきたけれども、そうではない。キャロルの晩年には小説作品として『シルヴィーとブルーノ』があるが、問題はやはり『記号論理学』の方だと思う。これは記号論理学の方では評価が低いが、時期を考えると先駆的だ。言葉もまた記号の組み合わせのテクノロジー、というドライな発見があった。

（文責・編集者）

せなかったが、フランスやアメリカなど民主主義を掲げる大国が武器を輸出することで受け入れ国の民主的勢力の抑圧、軍事化の進行を進めるという矛盾が指摘された。そして、武器移転を国際管理する方策として、日本が提案している国連への通常兵器の「登録制度」についてその有効性が争われた。

Dセクションでは、まず学生の湾岸戦争に対する疑問について話すことから始まった。なぜ戦争でしか解決しようとしなかったのか、はたして他の方策はなかったのか、戦争がドラマ化される怖さ、地域紛争に介入する必然性などの疑問点が出された。それらを踏まえて、まず油井氏から次のような説明があった。最後まで軍事的解決にこだわったアメリカの指導性について油井氏は、「明白なる使命」に代表されるアメリカのイデオロギー的な強い正義感、使命感を理解すべきだと指摘され、さらにそれを世界に及ぼすことのできた要因として、二度の対戦で疲弊した他国に代って、巨大な資本と工業生産力をもったことを挙げられた。添谷氏からは、逆に湾岸戦争は、アメリカの意気込みにもかかわらず日本やドイツの財政的な支援に頼らざるを得なかった事実が指摘され、アメリカは適切に自分の国力を認識し、一極主義を脱する必要性があるとの指摘がなされた。

学生の間ではハイ・ポリティクス、ロー・ポリティクス、ハード・パワー、ソフト・パワーなどの国力概念について確認したあと、日本も文化の影響や情報といったソフト・パワーが重要となるのではないかという意見が出された。またこうしたアメリカの「世界新秩序」とは何か、そのなかで国連はアメリカの国連協調の証左か、一国支配の隠れ蓑か、日本のアジアの一員としての貢献のあり方とは何か、などが議論された。

最終日にはこのセクション演習の内容が全体の総括討論の場で報告され、全体で議論が共有された。またこのほかにも、深夜に各セクションを訪問しあって論争する場面が多々見られた。いずれにせよこの類の課題は一朝一夕には答えの出せないものであり、わずか三日間で結論が導き出せるものではない。しかし湾岸戦争が我々に投げ掛けた課題を考え続ける上で、極めて時宜を得た企画であったといえるだろう。

最後に、立案の段階から終始好意的にご協力下さった運営委員、ご多忙の中をかけつけてご指導下さった講師の方々に厚くお礼を申し上げたい。

千人会

'91年9月～11月

◇現在会員　一、四五七名（実会員数）
（通算入会者一、八三六名）

◇新しく会員となられた方々

A　武蔵工業大学教授　西川　道治殿
A　㈱ケイ・ビー・エス建装部々長　志鳥　學修殿

◇会費ありがとうございます。

岡村文子、西村善四郎、海老沢克之、井手久登、木村宗男、出居茂、太幡祐己、石井彰、村上陽一郎、下田弘、沖塩荘一郎、熊田禎宣、國岡昭夫、林勲、林明夫、滝口亨、田中栄、中田良平、武澤信一、三村卓雄、朽津耕三、田中昭二、小堀桂一郎、千葉正士、大澤綱一郎、高村多賀子、石村善助、松田武彦、児玉久雄、伏見弘、色川大吉、井深淑子、松田徳一郎、岩崎不二子、小和田恒、小川智哉、米村貞蔵、尾形憲、楢林博太郎、後藤米夫、朝倉孝吉、東寿太郎、船山信子、奥田真丈、加藤一郎、伊藤泰、岡野澄、塩見利夫、安嶋彌、鞍馬菊枝、久武雅夫、永井克孝、大束百合子、加藤五六、釜范善一、横山宏、吉原健吾、鈴木忠義、磯部力、伊藤月美、小田切美文、関本昌秀、飯田経夫、関口利男、谷俊治、田端光美、沖中重雄、岡村浩、武藤英輔、滝幸三郎、吉利和、稲垣寛、青柳清孝、吉野正伍、大福族生、小川信子、松田千鶴子、矢吹晋、小林善彦、大谷登士雄、長尾龍一、佐々木克己、大竹誠、神田信夫、平沢茂一、本間正人、鈴木喬、堀光男、田村献、小田中敏男、坂井昭宏、桐原五十鈴、新田悟、神戸愉樹美、布川角左衛門、今井淳、前川真理、板垣與一、伊能敬、天利長三、川原栄峰、長坂舜二、末松安晴、宮田登、久場嬉子、友部直、長松昭男、森井真、森岡清美、鬼塚宏太郎、宮野彬、田島澄江、高橋三郎、坂野観司、末岡俊二、清水護、森田信義、小川捷之、伊藤成彦、井門富二夫、八木江里、松岡八郎、戸田盛和、木村富夫、安達義明、牧内操、大畠英樹、貝塚爽平、中村登志哉、正路徹也、莇盛晴、鶴岡義一、若林俊輔、藤村瞬一、久留都茂子、竹村憲郎、麓信義、日高精二、角尾稔、大貫一、笠井伍朗、酢屋善元、田村皖司、祖父江孝男、厚東偉介、中沢正和、石橋秀雄、福井正紀、満尾寿男、山本よしゑ、戸張よし子、太田時男、伊藤玄三、田中外次、井岡利明、大須賀節雄、石坂巌、加藤信朗、浅見一羊、秋田成就、国分康孝、平野敬一、吉沢英子、田原虎次、示村悦二郎、小林澈郎、柴田菊代、木下是雄、八戸信昭、梶木隆一、鈴木俊和、飯野利夫、岡村甫、佐藤共子、高木仁、今井哲哉、青木生子、水野伝一、米満澄、竹内与之助、山科高康、飯田芳男、生山智己、福井憲彦、戸田三三冬、福田隆義、森繁雄、小松八郎、熊川忠、村井資長、勝木保次、佐藤公子、松元文子、関惺治、磯部浩一、藤林宏一、鈴木順子、高野雄一、外池孝雄、横山実、城謙輔、池川郁子、田村光三、中島文雄、近藤保、谷重雄、尾田幸雄。
（敬称略）

◆千人会員からのたより

立教大学を定年で〝卒業〟いたしました。大学セミナー・ハウスでは教育の意味、合宿の重みを実感させて頂きました。これからもよろしくお願いします。
立教大学名誉教授　武澤信一

◇

私は任期一年を残して東大医学部を退官し、四月から東京都臨床医学総合研究所長としてつとめております。
永井克孝

◇

平素は御無沙汰しております。お詫びに本年はA会員分お送りします。
東京大学教授　村上陽一郎

◇

平成3年度外務I種試験に合格し、来年度より外交の実務につくことになりました。
東京大学法学部4年　吉原健吾

◇

初の女性館長誕生おめでとうございます。健康に留意し、あせらずジックリと頑張って下さい。
都立立川短期大学名誉教授　大竹　誠

◇

古巣に帰って一年余、現在、研究、募集、情報化を担当しています。
㈶松下政経塾研究主担当　本間正人

◇

東京都立科学技術大学を定年退職し、左記に就任いたしました。
北海道情報大学教授　小田中敏男

◇

誕生日につきお心遣いを頂き御礼申し上げます。幸いに元気で満九十歳になります。
布川角左衛門

◇

ベルリン自由大学での社命留学を終え、帰国致しました。支払いが遅れ申し訳ありません。
共同通信社記者　中村登志哉

◇

札幌に来て丸三年すぎました。
ジャルパック札幌支店　莇　盛晴

◇

大学のタクラマカン沙漠調査に参加し、ケリヤ川を踏査してきました。法政大学教授　伊藤玄三

◇

久々にAlma Mataを訪れ、旧師、旧友に温く迎えられ、セミナーをやって参りました。象徴のアイヴィが古い石造りの建物を美しく彩り、東部の古い大学の秋の静寂と美しさは格別でした。東京都立大学教授　小林澈郎

◇

無職多忙です。
学習院大学名誉教授　木下是雄

東京都立大学心理教育学科のエンカウンターグループ
('91.9.23)――鳴澤實助教授(前列中央)のご紹介で，メンバーの鶴田正英君らは，当ハウスの宿直勤務で活躍中。

寄付金報告

'91年9月～11月

〈一般寄付金〉
六、〇〇〇円　学習院大学児玉久雄ゼミ殿
一一、九二九円　成蹊大学　別枝行夫ゼミ殿
一〇、〇〇〇円　順天堂大学医学部附属　順天堂医院殿
一〇、〇〇〇円　日本女子大学附属高校殿

〈植樹〉
あんず二株　東芝エンジニアリング殿
いとひば一株　財団法人英語教育協議会殿
はなみずき㈱一株　日本司法書士会連合会　司法書士中央研修所殿
あんず二株　日本リクリエーション協会　遊九会殿

〈教育プログラム資金〉
八、〇九〇円　第156回大学共同セミナー殿

あんず2株を記念植樹――東芝エンジニアリングの中堅社員たち
('91.9.20)

業／務／通／信

'91年9・10・11月 秋季3カ月の合宿研修

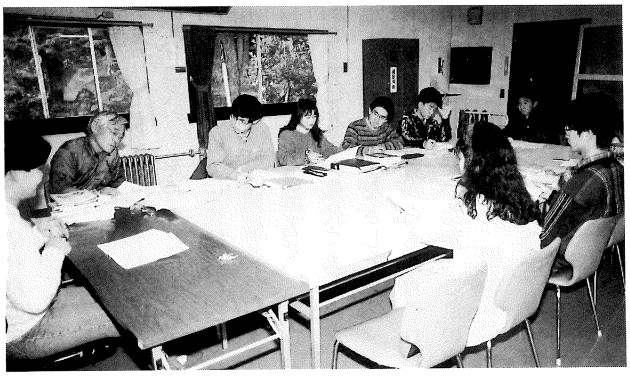
夏休み終盤のゼミ合宿が集中する9月。学術団体の主催する学会・シンポジウムや社会人の研究集会などが比較的多くなる10・11月――秋3ヵ月の利用状況のパターンは例年と同様であったが、利用者数は計一万五、八四三人（月平均五、二八一人）を数え、昨年より三、二七二人も多かった。稼働率も56％（昨年46％）と10％の上昇をみせた。

日本・EC国際会議――分科会ではボーダレス時代の教育・女性・環境も討議された（'91.11.23）

●紅葉の中のゼミ合宿―三つのトピックス

①伝統の卒論合宿――秋は卒論作成のための「中間発表」や「総仕上げ」の合宿が多い。教師と学友全員の前で一人ずつ研究を報告し、批判をあおぐ。セミナー室に緊張の空気がみなぎる。長年の利用者のお一人、一橋大学・石弘光教授がこの合宿をはじめられたのは開館二年後の'67年。今年で25年目になる。本号の『**わたしたちの合宿**』（下掲）では石教授に同ゼミの「伝統ある行事」をご紹介いただいた。

②平均年齢40歳――放送大学では、この秋は中埜肇教授が卒論合宿を実施された。ゼミのテーマは「生命と脳死」、メンバーは24名（うち女子16名）。「放送大学の学生は18歳から85歳。この合宿の参加者の平均年齢は40歳」とのことであった。生涯学習の時代である。



一橋大学石弘光ゼミの卒論合宿――1人90分の報告で緊張感がみなぎる。『わたしたちの合宿』参照。

③ハウス「二世」――坂本義和・明治学院大学教授の東大教授当時、ゼミ合宿で指導を受けたというOBの藤原帰一・千葉大学助教授とOGの磯村早苗・立教大学講師のお二人が偶然、同じ日に学生を連れてゼミ合宿を行ない、この丘で久々の再会を楽しんだ。また、10月はじめの週末にも、ゼミ合宿6件のうち「二世」教師が率いる合宿が3件もあった。夕食時の交歓会で在泊者にも紹介されたが、学生の間からは「わたしたちは三世」の声も聞かれた。

●さまざまな国際交流から

①日本・EC国際会議――11月中旬、ECの外交、産業経済、科学技術政策の

わたしたちの合宿

わがゼミの卒論合宿

一橋大学教授　**石　弘光**

セミナー・ハウスでの卒業論文作成のための合宿をはじめて、早や二十数年の年月が経過した。これは毎年11月末に、卒論の総仕上げのため四年生のゼミテンと指導教官である私が行なう合宿で、わがゼミでは伝統ある行事となっている。

一橋大学では、三、四年次の二ヵ年を通じるゼミ生活で卒論を書かせる。三年生の初めから原書の読み方を指導しつつ、次第に個別テーマを選択させ発表を重ねて、卒論の構成を固めていく。卒論合宿は、この最後の段階で行なうわけである。質疑もまじえ各人に九〇分が与えられ、自分の問題意識、その展開、章別編成などを全員の前で報告し、批判をあおぐ仕組みになっている。10名いると二泊三日を必要とするが、充実した時を送るだけに私も含め参加者は余り苦痛を感じない。

秋の深まりゆくセミナー・ハウスでのこの合宿は、学生諸君にとって一生の思い出になるらしい。卒業してからも、しばしば楽しい思い出として話題になる。卒論作成の進捗具合によりたまたま11月末になっているが、紅葉に色どられた自然の環境がまたすばらしい。幸いにして大体好天気に恵まれるので、滞在はまことに楽しいものになる。自分の卒論の仕上りとこのような環境での生活がマッチし、学生生活の最後を飾るにふさわしい合宿になる。

ここ数年間、二年生の前期ゼミの連中も担当した年に連れてくることにしている。この前期ゼミは（わが大学では小平分校での二ヵ年を前期と称する）、前述の本ゼミの準備にあたるものだが、主として専門の原書の読み方を指導している。大学生活でこのような合宿ができるのは最初らしく、卒論合宿とは異なった意味で学生は一体感、充実感を味わっているようだ。

この二十年余の間に、セミナー・ハウスを取り囲む自然環境は大きく変ってきた。住宅開発の波が押しよせてきた感じがする。またセミナー・ハウス自体も、建物が増え隔世の感がする。このような外界の変化にかかわらず変らないのは、われわれに対する職員の方々のあたたかい思いやりの心である。セミナー・ハウスに毎年出掛けてくる理由は、まさにこの点にあるといっても過言ではない。

卒論合宿を終えて

一橋大学経済学部4年　**佐藤　主光**

すっかり秋も深まった11月、ここ大学セミナー・ハウスにおいて恒例の石ゼミ卒論合宿が行なわれた。

二年間の自分の研究の総仕上げであり、ゼミテン一同緊張した面持でこれに臨んだ。先生の批評やアドバイスは、卒論の作成に限らず、皆の今後の社会生活にも役立つものであったと思う。大学院へ進学する私もこの合宿で刺激を受け、学習、研究意欲が大いに高められた感がある。

最前線に立つ政策担当者ら25名を含む内外の参加者48名が参集、「グローバル・コンテクストからみた産業の未来」をテーマに三日間のワークショップを行なった。EC委員会と日本国際問題研究会（会長は武者小路公秀・明治学院大学教授）の主催で、共同セミナー委員の進藤栄一・筑波大学教授が紹介者であった（13頁に**写真**）。

②CSS看中会――7年前に創設された、法政大学のサークルである。これまで当ハウスで5回の合宿を行なっている。英会話を学ぶESSは多いが、中国語圏からの留学生たちを交えて中国語で合宿し、日中友好をめざすグループは少ない。本号の『**私の国際交流**』（下掲）には、メンバーの一人で秋合宿の幹事をつとめた大島美友紀さんから一文をお寄せいただいた。

法政大学CSS看中会――中国，香港，タイの留学生を加えて。中央が顧問の井口克己講師。その右3人目が大島美友紀さん（『私の国際交流』の筆者）。('91.11.3)

●司法書士研修会―初利用の大型合宿

「法律家としての社会的使命、公的義務を自覚し、新しい社会環境に対処できる能力を開発する」。新しく司法書士となった人たちを対象とする全国規模の研修会（司法書士中央研修所主催）が9・10月に都合3回開催された（左掲の**写真**）。最大規模は180名で、いずれも5泊。参加者は20～60歳代であったが、その真剣な学習へのまなざしと生活マナーのよさは他の在泊者からも注目された。雨天の多い時期であったが、ここの自然環境と生活交流が喜ばれ、担当者からも「（都心のビルと較べ）研修終了時の参加者の表情に疲れが少ない。同職者同士の仲間意識も深められた」などのコメントが寄せられた。なお、3回の研修を記念して紅ハナミズキが主催団体の役員らの手で植えられた。

司法書士たちの研修風景――5泊6日の学習に熱気が溢れる。('91.10.10)

晩秋の丘で

「和顔愛語の宴」　'91年11月10日(日)

開館当初に共同セミナーやゼミ合宿でご縁のあった老教授を中心に、恩顧のある方々をお招きした集いが、飯田宗一郎・名誉館長の主催でもたれた。出席者の中の長老、板垣與一・一橋大名誉教授をはじめ、ほぼ10年ぶりでこの丘を再訪された方々など、なつかしいお顔が揃った。ご高齢やご健康上出席できなかった方々からはメッセージが届けられた。

この会は、外務次官にこのほど就任された小和田恒氏の就任のお祝いを兼ねたので、同夫妻も出席され、秋の長雨の後の、小春日和に恵まれた一日、紅葉の丘に遊ばれた。

晩秋の好日――“和顔”が並ぶ。出会いの丘で。

私の国際交流

中国を知り日本を知る

――CSS看中会の活動――

法政大学経済学部2年　**大島美友紀**

私たちのサークルの名称は、CSS看中会（Chinese Speaking Society）といいます。個性豊かな仲間たちが〝中国語を学びたい！〟という共通の目的をもって集まっています。

創設されてから7年が経ち、合宿は回を追うごとに内容の濃いものに仕上がってきていると思います。大学セミナー・ハウスでの合宿も、今回で5回になります。

サークルは、井口克己先生を中心に行なっています。活動方針の柱は次の3つです。まず第一に実用中国語の習得。第二は、中国の科学的認識。そして第三は、日中友好と人間関係の訓練です。

CSS看中会を創設した理由の根底には、〝本来の大学生にかえろう！〟という精神が流れています。

日常ではあまり話す機会がない中国語ですが、合宿の中では思いっきり使うことができます。合宿の内容は、実践的な会話をはじめ中国語で劇をするなど、ユニークなものを取り入れました。午前六時半からの朝練にも、積極的に参加し、ハードなスケジュールをこなしました。

一回一回の合宿で、私たちは〝言語〟を学びながら国際交流の下地をつくり、さらに文化や政治など、中国を科学的に理解する能力を養っていきます。幸い、私たちのサークルは、会員の四分の一が中国語圏からの留学生によって占められているので、日常中国語会話を楽しむ機会がとても多く持てます。また、留学経験をもつ先輩が多数おり、毎年長期留学する学生を送り出しています。

今後もサークル活動を通して、お隣りの国『中国』をより深く理解し、『日本』自身をも同時に理解したいと思っています。

大学セミナー・ハウスの、自然に恵まれた環境の中での合宿は、とても充実したものになりました。これからも、このような友好の場を大切にし国際交流をいつまでも続けていこうと思います。

利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
＊＊＊＝同月4回利用
日帰りを除く

■9月（135グループ、延六、〇九七人）
早稲田大学大学院地域史研究会
明治学院大学二部社会学科
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
白梅学園短期大学同窓会講座
早稲田大学理工学部英語会　佐伯　胖
東京大学教授　杉浦　智紹
駒澤大学教授　牧原　憲夫
法政大学講師　森川八洲男
明治大学教授　堀井　啓幸
帝京大学講師　新川　哲雄
学習院大学助教授　千羽喜代子
大妻女子大学教授　塩谷　勇
東京電機大学助手
芝浦工業大学生涯学習センター　千葉　浩彦
淑徳大学教授
横浜国立大学欧米文化コース夏季研修合宿
東京女子大学英語会
学習院大学教授　児玉　久雄
中央大学生活協同組合＊
早稲田大学絵画会
早稲田大学雄弁会
立教大学教授　藤田　昌士
法政大学教授　水野　節夫
早稲田大学講師　深澤　實
立教大学講師　磯村　早苗
千葉大学助教授　藤原　帰一
日本大学教授　花田　和史
学習院大学教授　門脇　卓爾
青山学院大学教授　中澤　進一
学習院大学法学部政治学科スタッフ・セミナー
明治大学教授＊　播　里枝
東京学芸会大学博物館学ゼミ
明星大学クラブマーチン
立教大学文学部集中合同講義A
慶応義塾大学社会科学研究会　中川洋一郎
中央大学助教授　倉田　良樹
一橋大学助教授
一橋大学国際部ディスカッションセクション
明治大学教授　神田　信夫
青山学院大学教授　深澤　實
明治学院大学教授＊　竹内　真一
東海大学教授　荒木昭次郎
明治学院大学教授　渡会　勝義
芝浦工業大学教授　石黒　哲郎
明星大学教授　塚田　紘一
武蔵大学教授　一楽　信雄
法政大学助教授　佐藤　健二
お茶の水女子大学教授　宮島　喬
駒沢大学教授　瀬戸岡　紘
早稲田大学教授　木村　利人
明治学院大学教授　増田　茂樹
東京都立大学助教授　鳴澤　實
芝浦工業大学建築学科八王子合宿ゼミ
筑波大学インターカレッジ人間関係ワークショップ・リユニオン＊
立教大学ドイツ文学科集中演習Ⅱ
立教大学教授　岩崎　俊夫
東京農業大学講師　大久保　武
東京大学弁論部
一橋大学教授　柴川　林也
淑徳大学教授　籏野　脩一
千葉商科大学講師　吉田　優治
中央大学講師　松井　豊
東京理科大学教授　沖塩荘一郎
早稲田大学講師　北野　弘久
早稲田大学教授　田村　恭

平均40歳——放送大学中埜肇ゼミの卒論合宿（'91.11.10）

中央大学教授　徳永　英二
東京外国語大学助教授　高橋　正明
放送大学社会学ゼミ
桜美林大学夏期英米文学・語学セミナー　蓮花　一己
帝塚山大学助教授　大谷　毅
信州大学教授
桜美林大学教職員組合
都留文科大学教授　和田　明子
明海大学助教授　黒須純一郎
専修大学教授　吉家　清次
独協大学助教授　大竹　孝司
高千穂商科大学講師　岩田　伸人
玉川大学教授　田中　宏
桜美林大学ヴォランティア
高千穂商科大学教授　木村　正俊
東京商科学院専門学校コミュニケーション合宿
創価女子短期大学助教授　西本　徹
帝京技術科学大学助教授　神尾真知子
国士館大学助教授　木原　英逸
駿河台大学助教授　熊田　俊郎
八千代国際大学講師　山口　桂子
駿台学園高等学校野球部
言語研究会
東京電機大学・産能大学夏のシンポジウム
関東近世史研究会
第28回大学教員懇談会
日本精神科看護技術協会
日本聖公会横浜教区＊
植物生体膜
くにたち市民オーケストラ
国際ロータリー
ボーイスカウト東京港12団
日本基督教団東京台湾教会
東京第一バプテスト教会
カンバーランド長老キリスト教会
日本自然保護協会サブレンジャー
C＋F研究所
東京国際基督教会
愛のファミリー協会
高橋聖書集会
相模大野聖書センター
バリ芸能研究会
日立製作所＊／日本司法書士会連合会＊／東芝府中工場／春日電機／日立電子サービス＊／東芝エンジニアリング＊／オタリ／富士電機＊／京セラ／伊勢丹データーセンター／東芝プロセスソフトウェア／丸美屋食品工業／ベスト外国語学校
〔個人利用〕
東北学院大学助教授　岡本　英男
岡山理科大学助教授　星野　卓二
V研究会　吉本　昌司

■10月（83グループ、延九、六一〇人）
千葉大学助教授　服部　岑生
東京外国語大学ロシア語劇＊
成蹊大学講師　別枝　行夫
中央大学教授　木島　淑孝
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
早稲田大学似島ワークキャンプ
東京都立科学技術大学教授　鈴木　喜久
東京女子大学講師　瀧田　佳子
津田塾大学教授　許　世楷
日本大学教授　小林　宏晨
東京工業大学教授　中野　道雄
東京学芸大学教授　原　聡介
東京学芸大学助教授　金谷　憲
大妻女子大学児童学科3年生卒論オリエンテーション
東京学芸大学講師　神戸　周
東京学芸大学大学院歴史学研究室
中央大学講師　鈴木　毅
東京大学助教授　内田　慎一
学習院大学フランス会部
国際基督教大学準教授　姜　尚中
順天堂大学病院業務改善セミナー　師岡　孝次
東海大学教授
中央大学駿河台支部
早稲田大学教授　渡辺　仁史
法政大学教授　黒川　和美
東京純心女子短期大学英語合宿
中央大学教授　長谷川聰哲
千葉大学助教授　佐藤　建吉
早稲田大学教授　岡山　隆
中央大学学生赤十字奉仕団
中央大学学生相談室
明治学院大学教授　宮野　彬
中央大学教授　田中　拓男
法政大学教授　五味　健吉
東京キリスト教学園秋期修養会
目白学園女子短期大学助教授　中島　明子
独協大学教授　霞　洋子
私立麻布高等学校高3学年行事
大東文化大学河野・鈴木ゼミ合同合宿
東洋大学教授　細井　洋子
大月短期大学教授　村越　洋子
首都圏ファンタジーグループ研究会
第18回国際学生セミナー
東京都中央区青年学級英会話
インマヌエル総合伝道団教会学校部
ユネスコ・アジア文化センター
新日本建築家協会関東甲信越支部
からだとことば研究所
日本分光工業／関東共立エコー／東芝半導体システム技術センター／栗田工業／ヒューマンライフセンター／雪印物産／京王アートマン／ノジマ／オタリ／日本司法書士会連合会／日本生産性本部／日本水産／富士ファコムシステム／ジャックス／ソフトウェアマネジメント／監査法人トーマツ／日野協力会／ニフティ＊＊／JUKI労働組合／ウチダユニコム／リバストン・システムズ／丸美屋食品工業／月星化成／日本エル・シー・エー／山万／富士電機テクノエンジニアリング／共栄ソフトウェア協議会
〔個人利用〕
東京都立科学技術大学客員教授　バリー・ロイ

■11月（101グループ、延五、〇四五人）
東京経済大学Club Accounting　中原喜一郎
東海大学教授
明星大学教授　吉田　恒雄
早稲田大学コンツェルト
法政大学CSS看中会
国際基督教大学フォーカシングセミナー
東京都立大学助教授　石井　昭
芝浦工業大学大学入試制度検討委員

会

東京都立大学教授　渡辺　恒雄
中央大学教授　真田　芳憲
中央大学教授　川崎　嘉元
明治学院大学教授　中山　弘正
千葉大学教授　藤井　良治
東京大学教授　川端香男里
中央大学教授　徳永　英二
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
立教大学教授　北岡　伸一
中央大学教授　三上　昭美
淑徳大学教授　米川　茂信
法政大学教授　松尾　太郎
東京都立大学教授　戸張よし子
上智大学教授　今井　圭子
芝浦工業大学教授　大塚　正久
東海大学教授　福田　平
東京都立大学助教授　日向野幹也
青山学院大学教授　佐藤　和男
立教大学講師　大塚勇一郎
東京外国語大学講師　古賀　正則
明治学院大学教授　秋山　智久
法政大学教授　公文　溥
明治大学教授　久保田義喜
一橋大学教授　石　弘光
明治学院大学教授　宮野　彬
東京都立大学助教授　広瀬　泰雄
東京学芸大学助教授　渡辺　健治
放送大学教授　中埜　肇
財界二世学院
東京神学大学全学修養会
玉川大学助教授　山口　栄一
国士館大学建築学科意匠ゼミナール
文化学園労働組合執行委員会
日本女子大学附属高等学校
私立大学教学問題研究会
第13回国際学生シンポジウム運営委員会
第156回大学共同セミナー
数学基礎論若手の会
アイセック日本委員会
現代資本主義研究会
現象学解釈学研究会
環境社会学研究会第四回セミナー
ルソール合奏団
開発教育協議会
日本キャンパス・クルセード・フォー・クライスト
インマヌエル総合伝道団教会学校部
ヘブライ文化研究会
日本精神科看護技術協会
からだとことば研究所＊
日本レクリエーション協会
日本国際問題研究協会
国際交流基金日本語課
日本・パキスタン協会
加藤納兄を支える会
日本使徒キリスト教会
新求道共同体
東京言友会
〝人間と性〟教育研究協議会
日本教会成長研究会
日本総合愛育研究所「愛育相談所」
石川島播磨重工業／雲母書房／日本POP広告協会／日本電気／東芝プロセスソフトウェア／シーアールシーシステム＊／日立電子サービス／伊勢丹データーセンター／東京三菱電機商品販売／安川電機＊／京セラ／ニフティ／オタリ／ウチダユニコム／カシオ計算機／アインシュタインインスティテュート／タチエス企画部／日本電信電話＊＊／春日電機／日本水産／カルソニック／雪印物産／ノジマ／東芝半導体システム技術センター／東芝OAコンサルタント
〔個人利用〕
一穂会　茂木　光子
千葉商科大学教授　影山　僖一
V研究会　吉本　昌司
札幌学院大学助教授　伊藤　守

The stay in IUSH was a very good change after being in Tokyo for about two weeks. The environment is suitable for academic discussions or thought. But my stay for 2 nights were too short to make any observations on what kinds of communications were taking place among the Residents.

The place is quiet and beautiful, though not far from the city, that is very impressive.

Tshewang Tandin, Principal
Bhutan

(October 10—12, 1991)

編集後記

「ニュースをいつも楽しく拝見しています」と書き添えて下さった年賀状を頂戴して、機関紙の編集という一号一号の積み上げが、セミナー・ハウスの〝総体〟を表現することを改めて思い直しています。

これは一年前の本紙新年号に綴った編集後記の書き出しである。その思いにいささかの変化もないが、時が移り、本号が編集子の手がける最後となることを記して、「読者」からいただいたご厚情に謝したい。

顧みれば、本紙39号に編集後記が登場してから十七年。その間、約二年ばかり〝選手交替〟があったが、法人運営の少なからぬ混乱の中で、主催プログラムの展開を基軸に、セミナー・ハウスのあるべき姿を求めて貫いてきた編集方針に、誤りはなかったと自負している。

組織も仕事も未分化の状態で、曲りなりにも定期刊行物に踏み切った頃のこと、創刊一〇〇号記念でデザインの一新を図ったこと、……この小さな出版物にも歴史が刻まれている。

「継続は力なり」との励ましのメッセージを下さった方の今年の年賀状に心を残しつつ、多くの人々に支えられて、与えられた職責を完うできたことの幸せをかみしめている。（能）

表紙の写真＝21ヵ国の寄せ書き

ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）主催の「出版技術者研修コース」に参加したイラストレーターやデザイナーたちによる寄せ書き。お得意のイラストと各国の言葉で「ありがとう」の文字が記されている。実物はパネルとして'91年10月12日、当ハウスに寄贈された。（別掲の英文は参加者の感想の一つ）

♣出版案内♣

✻新刊

ＦＤハンドブック
ＦＤプログラム小委員会編
発行日：1992年１月10日

- 大学教育の基本を理解する／示村悦二郎
- よい授業とは何か
  ——よりよい授業を行なうために／蠟山道雄
- 授業をどのように計画し実施するか／福田一郎
- 試験で何を測定し，どう評価するか／原　一雄
- 求められる授業改善への努力／山内正平

資料／シラバスの事例／大学設置基準（抜粋）

✻既刊

大学教員研修マニュアル１
大学教員の魅力開発
—ＦＤプログラムの実践—
発行日：1990年１月16日

大学教員研修マニュアル２
よりよい大学教育の方法を求めて
フロッピーディスク付（文献目録）
発行日：1991年３月25日

♠フロントにてお頒けしていますので，ご来館の折りには是非お求め下さい。また，郵送をご希望の方は企画室(0426-76-8532)までお電話下さい。

◆頒布価格
FDハンドブック **1,500円**，マニュアル１ **1,500円**，マニュアル２ **2,500円**

「セミナー・ハウス」一二五　一九九二年一月二五日号　発行＝財団法人大学セミナー・ハウス　〒一九二-〇三　東京都八王子市下柚木　☎〇四二六-七六-八五一一　振替口座　東京五-七四五九〇番／編集＝大学セミナー・ハウス企画室／編集・発行人＝岡　宏子／制作＝中央公論事業出版